下の下は真っ平で

大河内一滴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
下の下は真っ平で

【Ｎコード】
Ｎ７０１６Ｍ

【作者名】
大河内一滴

【あらすじ】
いつもの日常、楽しい高校生活、友達との何気ない会話、いつまでも続くと思っていた世界は次に目を開けたときには何もかもがなくなっていた。この世界に何が起こっているのか？彼女が見た３年後の世界とは？
アサ
サヤ
二人の女の子の物語

アサ　1

目を開けると白い天井が見えた。

暗い部屋の隅にあるベッドの上で眠りから覚めたばかりの私は上半身をゆっくりと起こしてあたりを見回した。いつもより数段重く感じる体は私の意識をほんの少しだけ遠いところへ送ろうとする。

「知らない……部屋だ」

部屋の中には私がいるベッドのほかにはイスしかなく、殺風景な上に狭い。まるで独房のようなデザインのこの部屋は明らかに昨日まで私が寝ていた部屋ではなく、私はいつもの調子を取り戻そうとちょっとしたしゃれっ気を含めて独り語ちてみた。

「いや、本当にどこだここは」

戸惑いつつも昨日の行動を思い出してみる。昨日は学校にいって……終業式が終わった後いつものメンバーと1学期の終わり祝いというへんてこな名目でカラオケにいって帰りにアイスを食べて、ゲーセンでプリクラとって、解散したあと風香がトイレに行きたいって言い出すから、鞘と三人でコンビニによってちょっとだべって……それから

「あれ？それからどうしたんだっけ？」

みんなと別れたところまでは思い出せるけどそれ以降の記憶はどんなに思い出そうとしても出てこない。光のない部屋は少しずつ私の心に恐怖心を与えていた。

不意に扉の向こうから物音が聞こえた。

（誰かいるのか？）

コツコツと聞こえる足音は私がいる部屋を目指しているようで扉の前でその音は止まった。恐怖心はピークに達し、震えをごまかすよ

うに両手は弱弱しく毛布を握り締めた。

そんな状態であったから、扉が開きそこに見知った顔を確認するまでの心境の変化は激しいものだった。元々極度の怖がりなのでこの場で失神してもおかしくはなかったと思う。とにかく扉を開けてこの部屋に入ってきたのは私の友達だったのだ。

「朝ちゃん！」

鞘は最初に私を見てちょっと驚いた顔をしたと思ったら次の瞬間には一直線に私のほうへ向かって突っ込んできた。

「ゴフッ」「目を覚ましたんだね～朝ちゃん！会いたかったよぉ～」

普段からハイテンションで訳の分からない行動をとる鞘だが、いま私に抱きついて泣いている姿は一段と意味不明だ。というか抱きつかれた勢いで私の口からはしたない音が出てしまった。

「……おいっ鞘！ちょっと落ち着け！会いたかったって昨日あったばっかりだろ？」

「朝ちゃんが目覚めた記念に今日は宴だね！パーティーだよ！朝ちゃんは何飲む？ビール？ちゅーはい？あ、その前に料理を作らないとね！今日は赤飯だよ！赤飯ってなんの豆使うんだっけ？倉庫にあるのかな？」

ダメだ話が通じてない。鞘は意味不明なことを矢継ぎ早に話しだしていてもう聞き取るのがめんどくさくなってきた。しかし、鞘のいつもどおりのテンションのおかげで私の恐怖心はいつの間にかなくなっていた。いつもハイテンションで感情がコロコロ変わる不思議な子だが、鞘がいるとどんなときでも明るい気分でいられるんじゃないか、そう思わせられるような不思議な魅力もこの子は持っている。

「鞘、少し落ち着いてくれ。まず、ここはどこなんだ？あとさっきも言ったけど昨日鞘とあった後の記憶がないんだけどコンビニに行った後、私達はどうしたんだっけ？」すると、さっきまであんなにはしゃいでいた鞘が急に止まった。そしてちょっと困ったような顔

を浮かべて言った。
「そっか……朝ちゃんにとっては昨日のことなんだよね。今から言う話は朝ちゃんには信じられないような話だと思うけど、落ち着いて聞いてね」
さっきまで落ち着きなく喋っていたのは鞘のほうなのだが。いつになく真面目な鞘の表情に私は黙って頷いた。

「鞘ちゃんの言う『昨日』から、今日はもう3年経っているだよ」

「えっ」
いきなりのトンデモ発言に戸惑う私を制して鞘は話を続ける。
「今でもあの時のことは覚えてる……朝ちゃんと風ちゃんとコンビニからでておしゃべりしてたら突然地震がきて……朝ちゃんは建物の下敷きになっちゃったんだよ。幸い命に別状はなかったんだけど朝ちゃんは意識不明のままで……植物人間っていうのかな？要するに意識不明のまま3年間が過ぎちゃった。もう意識が戻ることはないかも知れないって言われてたけど、それでも朝ちゃんだけは助けたくて、私が看病みたいなことをしてたんだ……目が覚めてくれて本当にうれしかった」
そういうと鞘はまた少し目に涙を浮かべながら微笑みかけた。
私はただただ呆然とするしかなかった。昨日から3年経ってる？いやもう昨日ではなく3年前の昨日だから、私が『昨日』だと思っていたのは3年前のことで今日は『昨日』から3年後だというのか？混乱している私の思考ではそんなスケールの大きな事件は単なる冗談にしか聞こえなかった。
「冗談……じゃないんだよな……」最初に思った言葉を出してみたが、鞘の話ぶりと表情をみて冗談じゃないだろうことが少しづつ自覚され始めた。元々鞘は冗談をよく言うのだが、このような嘘はつかない。ついたとしてもすぐばれてしまうのだが。
ようやく鞘の言うことを飲み込みつつ改めて鞘のことを見てみる

と、いつもどおりだと思っていた鞘が
確かに『昨日』と雰囲気が違うことに気づいた。いつもと同じだと思っていた表情を作り出している顔は少しすっきりしていてちょっとだけ大人な雰囲気をかもし出しているし、いつも私と比較して落ち込んでた胸も少しではあるが膨らんでいるようだ。明るかった髪の色も少しおとなしめのダークブラウンになっていて、ショートだった髪も少しだけ伸びてるようだ。服も明るい色が好きだった彼女にしては珍しく黒のTシャツにジーンズだ。
「そんなに見られると照れちゃうよぉ～」中身はそこまで変わってないらしい。
「とりあえずとんでもない話だけど何とか飲み込めたよ。未だになんだか信じられないけど……そっか、3年も経ってるのか。ってことは鞘は今大学生なのか？風香はどうしてる？美保は？」
「それは……」鞘が少し言葉につまって沈黙が訪れた瞬間。ビィーというブザーのような音が鞘のズボンの後ポケットから聞こえた。ケータイにしては変な着信音だと思った私の考えに反して、鞘がポケットから出したのはケータイにしては大きく四角くて無骨なトランシーバーみたいなものだった。鞘は少し険しい顔をしてトランシーバーを見てスイッチを押し、ブザー音を消した。そして私の方に向き直った。また先ほどのように真面目な顔になって。
「さっきここはどこだって聞いたよね？ここは私の隠れ家みたいなものなんだ。で、いろいろ詳しく話さないといけないことがあるんだけど今は時間がなくて、急がないといけないの。後でちゃんと話すからとりあえず私についてきてくれないかな？」
そういって鞘は私に手を差し出した。
ここから私にとって3年越しの『今日』がはじまる。

アサ　1（後書き）

勢いで書いてみました。世界観としてはバイオ＋バトロワみたいな感じになると思います。2個目の連載小説だけどこっちのほうが更新はやいと思います（ノリ的に）

ちなみに

朝（アサ）

鞘（サヤ）

風香（フウカ）です。

アサ　2

鞘の手をとった私は何とか立ち上がることができた。「大丈夫？立てるかな？一応朝ちゃんが寝てる間も動けるように体をマッサージしたり動かしたりはしてたんだけどー」と鞘が心配そうに言った。たしかに3年も寝たきりなら普通はまったく歩けなくなるだろうが、そこは奇跡なのか鞘のマッサージが良かったのか何とか立つことはできた。というか友達とはいえ鞘に全身マッサージされたのかと思うとちょっと恥ずかしい。

鞘の肩をかりてゆっくりと歩き部屋をでた。鞘がいうにはこの部屋はもともと病院の地下にある倉庫だったらしい。なぜ病室ではないのか気になるし、そういえばさっき隠れ家みたいなとこといっていたのも気になるけど、鞘は少し急いでいるらしくなんとなく聞きづらかった。鞘の目的地に着いたらいろいろ聞かせてもらえるらしいからそこまでの我慢だ。部屋の外は長い通路になっていて所々に扉があった。その扉の奥すべてが私がいた部屋のように誰かが寝ているのだろうかと疑問に思ったが、その疑問に気づいたのか鞘が「朝ちゃんが寝てた部屋以外は医療器具とかが散乱してて入れないんだよ」と答えた。

しばらく進み階段を上るとロビーのようなところに着いた。しかしイスは倒れ、正面玄関のガラスは全て割れていて病院というよりは廃屋とでもいうべき状況になっていた。日は暮れていないらしく外はまだ明るいが、中にまで光は届かず怖がりな私にとってこの建物の状況は普段なら卒倒するレベルのものだったが鞘に引っ張られてる今、何とか平常な気持ちでいられた。

「裏口に車を停めてあるから、朝ちゃんそこまで歩ける？」

「何とか大丈夫だと思う。ってか鞘が車の運転するのか！？」

「失礼な！私だってもうおとなの女性なんだよ！」

鞘は胸を張りながらそう言った。そういうところが子どもっぽい

んだけどな。それにしてもドジで危なっかしかった鞘がまかか車を運転するようになるなんて、3年も経てば人は変わるんだと肩をかりてる状態でいつもよりちょっとだけ顔が近い鞘をしげしげと眺めてしまった。

「ときどきブレーキと間違ってアクセル踏んじゃうけど、今まで事故ったことないから安心していいよ」こんなに不安すぎるセリフを聞いたのは初めてだ。タクシーに乗りたい。

「……それに事故が起きるほど車は通ってないしね」鞘がちょっと沈んだ顔をしてつぶやいた。

裏口から病院を出た私と鞘は、鞘が乗ってきた車に乗り込んだ。鞘の車は黒色のジープのような形で、やはり鞘の趣味とはなんとなくかけ離れている気がした。鞘がキーを指しこみエンジンをかける、セリフのわりにスムーズな発進で車は動き出した。

しばらくの間沈黙が流れる。鞘は運転に集中しているのか前をまっすぐ向いたままこっちをむくことはない、私はそんな鞘に言葉をかけることができずにただ窓にうつる景色を眺めていた。街は車も人もまったく無く、閑散としていてどこか不気味で異様な感じだ。時々移りこむコンビニやスーパーなどは電気も消えていて、中は潰れた店のようにガランとしていてところどころガラスが割れていたりする。目が覚めてから驚くことばかりで疑問や不安があふれて押しつぶされそうになる。

「もう異変には気づいてるよね？」

唐突に鞘が話しかけてきた。主語が抜けた分かりづらい会話はいつものことだが、私のことや鞘自身のこと、この世界のすべての異変についてのことをいっているのだろうと、私は鞘が見ていないのに頷いた。

「あれは朝ちゃんが事故にあってから少したってからだったかな」

私が頷いたのに気づいたのか、前を向いたまま鞘は話を続けた。車は晴れ渡った空の下を進んでいく。やけに止まらずに進んでいくなと思っていたら、信号の光消えていた。

「朝起きてテレビを見てたらテレビが突然真っ暗になっちゃって。あの『ずばり！』とか言ってるニュース、最初はテレビの電源が切れたのかなと思ったけどテレビはついてて、他のチャンネルにしても砂嵐だったりビーって音がなったりで……たぶんそれが始まりだったと思う。お父さんが不思議に思ってパソコンをたちあげてネットにつなごうとしたけどそれもダメで、私も風ちゃんや恵ちゃんに電話したんだけど電話もつながらなくて、しょうがないからお父さんは仕事に行って私と妹は学校に行ったんだけど……話がちょっと長くなっちゃったね。かいつまんで説明するとその日から全ての通信機器がつながらなくなっちゃったんだよ」

鞘の話は途中でつっかえたり、変な方向に行ったりと分かりづらかったが。通信機器全てがつながらなくなった日、学校も鞘のお父さんの職場も、街中が大パニックだったらしい。たしかにテレビやケータイがつながらなければまったく情報が無いのだから不安はすごいものだろう。鞘達はなんとか何が起こっているのかを知るために、あるものは役所に駆け込んだり、あるものは1日中ラジオ、テレビを見張って情報を得ようとした。しかしその努力もむなしく誰も何が起きているのかを知るものはいなかったし、知り得ることができた人もいなかった。

そして1週間後、今度は電気の供給が止まった。

「いやぁ電気が止まったときは本当に困ったよ～テレビが消えたときは『好きなテレビが見れないじゃん』ってくらいにしか思ってなかったんだけどね。ほら、前に話したよね、猫の侍が妹のために悪の組織に入って正義の味方を倒そうとするアニメ『御伽猫草子』。だから私の生活にはそんなに影響は無かったんだよ。だけど一週間して電気が止まったときは本当にみんな大混乱になって街中で事故や軽い暴動みたいなことが起きたんだよ。そりゃ信号も街灯も電車

もクーラーもシャワーもコンロもレンジも全部使えなくなっちゃったからね。」
鞘はちょっとおどけたように、電気が使えなくなった後学校に電車を使ってきてた子がこれなくなったり、家族でご飯を食べるにもコンロが使えなくてパンしか食べれなかったりしたことなど、電気が止まってからのことを話した。
「電気が止まってからは大変だったね～その3日後くらいには水まで止まっちゃうし。でも本当の地獄が始まったのはそれからだったんだ」
「どういうことだ？」鞘のほうを向いて聞いた。
「それはね……っ朝ちゃん！」
いきなり鞘は左手で私を押さえつけて、車を止めた。

アサ　2（後書き）

説明回です。
こうしたほうがいいとか指摘とかありましたらどんどんいってください。

アサ　3

突然の急ブレーキに私の体は前へ飛び出そうとなるが鞘が手で押さえてくれたおかげでガラスに頭をぶつけることだけは何とか回避できた。

「いきなりどうしたんだ！」前のめりになった体を戻しながら私は鞘に聞いた。

「……水まで止まってからはいろんなところで暴動が起きてさ、もう世紀末って感じ？私も家族もおびえながら暮らしててさ。……でもそうした暴動も長くは続かなかった。いや、今でもあるにはあるんだろうけど……まぁ続かなかったのも良い意味ではないし。」

私の問いかけが聞こえていないのか、鞘はシートベルトをはずし、後に身を乗り出して何かゴソゴソと取り出し始めた。その姿はどこか淡々としててちょっと怖い。

鞘のほうを向こうとして、私は車の前に人が3人ほど突っ立っているのを見た。先ほど鞘が急ブレーキをかけたのは、角を曲がったときに急に人が現れたからなのだろう。

「おっ、おい何を言ってるんだ、分かるように説明して……そ、それ……刀なのか？」

後部座席に置いてあったのだろう刀を持ち出して、鞘はこちらのほうを一切見ずに車のドアを開けた。

「『あいつら』は突然現れた。最初は変な形だったのにいつの間にか人みたいになって、今では形は人そのもの。『あいつら』は人間を襲い、食料にし、利用するようになった。もう人間同士で争ってる場合じゃないよ、『あいつら』に襲われてほとんどいなくなったけど」

鞘はフロントガラス越しに映る人達を睨み付けながら言った。フロントガラス越しに見える人達はこちらに気づいたのか、振り返り、こちらに向かって足を踏み出した。

「『あいつら』は日を追うごとにどんどん私達に似てきてる。今はまだ動きがぎこちないけど……でも1つだけ変えられないところがあるみたいで、私達はそれを目印にして『あいつら』と私達人間を見分けることができる」
鞘は車から足を出し、車をでる。
車の前にいるヒト達は時々足がもつれるようにしながらも、こちらに近づいてくる。
「目が紅いから、『紅目』とか『赤いやつら』とか呼ぶ奴もいるけど私は簡単に一言で『あいつら』を呼称する」
ところどころ不自然な動きをする奴らが車の近くまで近づいてくる。
独り言のように話していた鞘がドアに手をかけ一言つぶやいた。

「敵」

ドアがやや乱暴に閉められた。

近づいてきたヒト達はそのままボンネットに飛び乗ろうとする。
目は血のように紅かった。

アサ　3（後書き）

ちょっと短くてすみません。

アサ　4

鞘はゆっくりとした足取りで
『敵』に近づいていく
抜き身の
ままの刀を肩に担ぎ
そのまま鞘に気づかずにボンネットへ上って
きた『敵』の後に回り込み
刀を思
いっきり振り下ろす
フロントガラス一面が真
っ赤に染まっていく

私が見ることができたのはここまでだった。

体を丸め込むようにして耳をふさぎ閉じているはずの目をさらに深く閉じるようにまぶたに力を入れた。思い出すのは今朝起きた時から今までのこと、正確には朝ではないのかもしれないが。起きたら3年の月日が経っていたこと。ちょっと大人になった鞘に飛びつかれたこと。足が思うように動かないこと。突然の急ブレーキ……そして敵。鞘の表情、言葉、刀、血。
どれも今までの人生を根底から覆すような出来事ばかりでもうど

うしていいのか分からない。不安と恐怖に押しつぶされてしまった。いつの間にか目は潤み口からは嗚咽が漏れる。全身の震えが止まらない。

「うっ…うぅ…夢なら覚めてよ」

ドアがガチャっと音を立てて開く。

誰かが運転席に座りドアを閉める。

私は顔を運転席のほうに向けることができなかった。

たぶん運転席に座ったのは鞘なのだろう。いや、でもその鞘は果たして本当に3年前私と一緒にいた鞘なのかは分からない。鞘はいつの間にか別人になってしまったのだろうか、少なくとも私の知ってる鞘は刀なんか持ってないし、怖くは無かった。

運転手は声を発することもせず、静かにエンジンをかけ発進した。しばらくの間、車は無音の中を進んでいく。途中で運転手は片方の手でガサゴソと何かを探り。音楽をかけた。ショパンのノクターン、私の好きな曲の1つだった。

曲が終わりしばらくして車が止まった。エンジンが止まったことでさらに車内は静寂になる。

「いきなりのことだらけで怖かったよね。ごめんね」鞘は言った。

顔を上げて鞘を見る。鞘の服はところどころ茶色くなっており顔には拭った血のあとが残されている。そのまま鞘と見つめる状態になった。

「朝ちゃーん！」

いきなり鞘が抱きついてきた。少し生臭い感じの臭いが鼻を突き抜けるがすぐに鞘の髪の毛の匂いにかき消された。鞘の髪はいつも良い匂いがする。

「うわっ！いきなり抱きつくな」

「えへへ～もうちょっとだけ～」

払いのけようとするがどこにこんな力があるんだという位の怪力

で抱きしめ離そうとしない。そのまま手を私の頭の後ろに回して撫でてくる。
「ごめんね。怖かったよね。起きてからいろんなことがあって不安だよね。私もこんなんだから上手く今の状況を説明することできなくて。……でもこれだけは言える。例えどんな状況になったとしても私は朝ちゃんだけは必ず絶対守ってみせる。私は決めたよ！」
抱き合ってる形なので鞘がどんな顔をしてるのかは私からは分からない。いつものどこか抜けた幼い感じの顔なのか、さっき車を出て行った時の無表情な顔なのか、それともまた別の知らない顔をしているのか。でもなんとなく、なんとなくだけど私は鞘を信じることにした。それは今の言葉をきいたからでも抱きしめてくれたからでもなく、言葉で表わすなら『鞘だから』ということなのだろう。
鞘が抱きしめてくれたことによって私の心は幾分か落ち着き、緊張が解けたことでまた涙が止まらなくなった。それでも鞘は抱きしめ、私が落ち着くまでずっと頭を撫でてくれた。

「鞘ありがとう。私はどんなことがあっても鞘を信じるよ」
涙がとまった私はさっき思っていたことをそのまま鞘に伝えた。鞘はまだ私を抱きしめていて少し胸が苦しかった。
「う～ん、3年間の成長でさらに大きくなってるとは。これは揉み応えがありそうですな～」
そうつぶやいた鞘の頭を私は無言で叩いた。

アサ　４（後書き）

ちょっと書き方を変えてみました。
次は少し別の話になると思います。

サヤ　1

「お姉ちゃん早く起きないと遅刻しちゃうよ！」

私の一日にとって一番苦痛であるのは心地よい眠りから目覚めさせられるこの瞬間であった。

「おぉ～妹や、私はもうダメかもしれぬ。二度と覚め眠りにつく前にお前の顔をもう一度見たかった」

「なに言ってるのお姉ちゃん！朝ごはんもうできてるよ」

けなげで真面目な妹はこうやっていつも私を起こしてくれる。こんな可愛い妹のためならば起きなければならない。

「あと３０秒だけぇ～」

だけど私の心はとことん自分の欲求に忠実なのだ。

「鞘！梢！お母さんもう行くからね！」

私の両親はいつも朝が早く、私と梢が学校に行く準備をするころにはもう家を出ている。とても働き者で良い両親なのだ。どんな仕事をしてるのかは前に聞いたけど忘れちゃったが。

「お姉ちゃん準備できた？」「ばっちりだよ梢！」

妹と私はともに家を後にする。妹の梢はこの春から私立の有名進学校に行くことになったのだが、一緒に家を出て登校することは小学校のころから変わらない２人の日課なのだ。

「じゃあ私はこっちだから、またねお姉ちゃん」

「梢いってらっしゃーい！」

梢を見送った後、私は皆と待ち合わせしている場所へと急ぐ。同じクラスの友達と朝は一緒に登校する約束をしているのだ。しばらく道沿いに進んだあと皆が交差点のそばにあるコンビニの前にいるのを見て歩を早める。

「おっ鞘、やっと来たか」
朝ちゃんが私に一番最初に気づき声をかけてくる。
「おはよう朝ちゃん！」
私はいつものように朝ちゃんに挨拶する。
「さやー遅いぞー」
風ちゃんが振り返り私を見て声をかける。
「ふうちゃーん遅れてごめんねー！」
私はいつものように風ちゃんに抱きつく。
「もうあと少し遅かったら置いていくところだったんだぞぉ」
「ごめんねダーリン、なかなか服が決まらなくてー」
「服なんて君が来てくれれば何だってかまわないさ！」
「ダーリン！」「さや！」
「…急がないと遅刻するからそろそろコントは辞めろ」朝ちゃんに頭を小突かれ私達はようやく抱擁をやめる。
「ったく、お前には関西魂ってのがないのか！」ちょっとすねた様に風ちゃんが言う。
「私は関西人じゃない」
「でも朝ちゃんのこういうところが私は好きだよ。ちょっと空気が読めないっていうか、面白くないっていうか」
「さや…そこまで言わなくても」
「ほら、鞘も朝も早く学校に行かないと遅刻するぞ！また白石に怒られるぞ」風ちゃんが真面目な顔をして言う。
「はーい」と私。
「いや、お前のせいで時間がかかってんだろ！」と朝ちゃん。
私達3人は急いで学校に向かうのだった。

私、家隆鞘（いえたかさや）と前下朝（まえしたあさ）、南風香（みなみふうか）は同じクラスの友達だ。2年になって最初の林間学校の班が一緒になってそのまま気づいたら友達になっていた。比較的3人とも家が近く、行き帰りはもちろん大抵どんな場面でも一緒に過ごすことが多い。

「鞘、今日の宿題やってきたか」
「ばっちりだよ朝ちゃん！宿題見せてください！」
「最初のばっちりはどういう意味だ！」
「ばっちりやってないの略だよ！」
「重要なところを略すな」

いつものようにふざけ合いながら3人は学校を急ぐ。

サヤ　1（後書き）

サブストーリー的な扱いだと思います。
次はなるべく明日、明後日までに書ければと……

アサ　5

「ここが私が今お世話になってる基地だよ！」
鞘がそういって車を停めた。目の前にはどこまでも続いているかのような鉄柵に広場が続いていた。正面の門には人が二人立っている。鞘が言うには「敵がいつくるか分からないし、味方かどうかを確かめるためには1日中門番が必要なんだよ」ということらしい。広場の奥には白い2階建ての建物が見える。
「もともとは自衛隊のちゅうとんきち？っていう所だったらしいよ」
「お前は駐屯基地の意味が分かってるのか？…自衛隊すらも怪しいな」
「さすがに知ってるよそれくらい！まぁ中にいた人達はいなくなっちゃったんだけどね」
鞘が覚えてるかどうかは分からないが、私が事故に遭う前のころからこの駐屯基地は移転する話が出ていて、自衛隊の人員数は縮小されていた。考えてみれば現在の状態と基地の移転は何か関係があるのかも知れない。そう思って鞘に自衛隊のことを聞いてみたが「3年間一度も見てないから分からない」そうだ。

そんな話をしながら門に車を近づけていった。門番の前でとまり、鞘が車の窓を開ける。門番の男の人が近づいてきて鞘の顔と私の顔を覗く。幼い感じの顔立ちで、ぱっと見たところ私と同じくらいの年齢みたいだ。
「隊長、お疲れ様です！」
「うん」
「隣の方はどなたですか？」
「友達」
「失礼しました、お疲れ様です！」
門番の人が言い終わる前に鞘は窓を閉め、車を発進させた。後を

向くと門番の人はこちらを向きお辞儀をしていた。きちんとした軍隊といった感じではないが、規律はきちんとしている様子が伺える。
「……って隊長！鞘！？」
「へへへ……恥ずかしいから言わなかったんだけどいつの間にかそうなってたんだよね～」
鞘は照れくさそうにそう言う。私は鞘が隊長ということ不自然なことに疑問を感じずにはいられなかった。今、のんきに口笛を吹いている（しかも口笛は吹けていない）この鞘が隊長と呼ばれるなんて信じられるわけが無い。
「あ、でも隊長っていっても単なるあだ名みたいなもんだよ。別に軍隊みたいにぴしっとしているってわけじゃなくし。ただ大人数で行動するときとかにグループごとに指揮しやすいように何人かのまとまりで班分けして、そのグループに効率よく命令するためにリーダーみたいな役割を置いてるってだけだから。つまりは単なるパシリだよ」
鞘の話でようやく納得した。つまりは大人数をいっぺんにまとめることが難しいから、隊長というリーダー役を作って、隊長に命令するといったシステムなのだろう。生徒会長と学級委員長みたいな。それで普段の行動が目立つ鞘が隊長に選ばれたということである。しかし鞘を隊長に選んだ人は隊長があだ名みたいなものだと言ってるような子をよく隊長に選んだものだ。もしかしたら鞘が自分から立候補したのかもしれない、そういえばこの子はよくできもしないのに学級委員とかになりたがるタイプだった。

車を車庫に入れて車から出る。鞘の肩をかりてゆっくりと建物の中に入っていく。建物は寮のようでいくつもの部屋が並んでいる。私と鞘は一番奥の部屋の扉を開けた。
「ここが私の部屋だよー広いでしょ！」
鞘が紹介した部屋は確かに広くて1人で住むにはどこかもったいないくらいだ。鞘の部屋にしては飾り気がまったく無く、どこか寂

しい。ベッドは起きた後そのままにしていたようでぐしゃぐしゃになっている。それ以外には生活感を感じるものは無く、この部屋に住みだしてからどれだけ経つのかは知らないが、寝る以外にはほとんど利用してないのではないかということが伺える。鞘は私をベッドに座らせた。

「やっと到着したね。しばらくはちゃんと体を動かせるようになるまで私の部屋で暮らしてもらってもいいよね」

「いいけど……鞘はどこで寝るんだ？」

「ん？私も朝ちゃんと一緒に寝るよ。ドキドキの共同生活だね！」

「んー不安しかないんだが」

「大丈夫！朝ちゃんは私が絶対に守るよ！」

そんな鞘が一番私を襲いそうな気がすると思ったがこれは言わないでおこう。

アサ　5（後書き）

ちょっと遅くなってしまった
次こそは早く書き上げたいものです。

サヤ　2

「昨日のテレビ見た？」
「消防隊のドラマやつか？」
「違うよーもっと前にあったやつ」
「あぁ、８時のバラエティーだろ。アサみたいな笑いが分かってない奴が見るわけないじゃん」
「失礼な！見ないのは勉強してるからに決まってるだろ！」
「消防隊の恋愛ドラマは見てるのに？」
「あれは……フッキーが出てるから見てるだけだ」
「あら、アサってば結構ミーハーなのね」
「風香だって好きだろ！フッキー！」
「まぁ好きだけどねぇー」
「２人ともまったく違うよ！夕方にある『オレンジレシピ』って番組のことだよ！」
「いや、みねぇよ！」
「っていうか、それまだ学校にいる時間にある奴だろ！どうやって見るんだよ！」
「録画して見るんだよ！昨日はこの街オススメデザート特集だったんだよ！食べたかったなーオレンジシフォンケーキー」
「録画してまで見るものか？サヤ昨日ダイエットするって言ってなかったっけ？」
「それは……来週からしようかと」
「その前に鞘勉強はしてるのか？」
「それも……来週からしようかと」
「来週はテスト本番だろ！」

昼休は朝ちゃんと風ちゃんと３人で弁当を食べながらいろんなことを話す。だいたいは昨日みたテレビとか午後の授業や放課後の話

だけど、たまには朝ちゃんが部活の話をしたり、風ちゃんがクラスの男子の話をしたり、私が梢やクラスの友達をランチにご招待したりする。ちなみに今日のランチは私と朝ちゃんがお弁当、風ちゃんが売店のパンだ。

「そういえば自衛隊の駐屯地が移転するって話知ってるか？」
パンを食べ終わった風ちゃんはアイスティーを飲みながら思い出したかのように話した。
「あぁ、1ヶ月後には全部撤去するらしいな、すごく急に決まったよな」
そう言って弁当をしまう朝ちゃん。弁当箱の横にはいつものようにペットボトルのウーロン茶が置いてある。
「ほえー、じえーたい？」
まだ弁当が半分ほど残ってる私はご飯を箸で突っつきつつ返事をする。手にはトレードマークのイチゴオレ。誰になんと言われようとも、ごはんとイチゴオレの組み合わせは変えられない。
「サヤ……まさか自衛隊を知らないわけじゃないよな？」
「失礼な！自衛隊くらい知ってるよ！国を守ってくれてる人たちだよね！」
「んーその認識は確かに間違っちゃいないが、高校生にもなってそれはどうかと思うぞ」
「むー、それでそのじえーたいがどうかしたの？この町に来るの？」
「いや、それは逆だ。この町にいた自衛隊が違うところに引っ越すんだ」
「え！？この町にじえーたいっていたの？」
「どこをどう通ればこの町に自衛隊がいることを知らないでいられるんだ！」
「いいじゃんそんなこと知らなくてもー」
「いや結構重要だろ、それはともかく話を戻すけど私の親戚のおじさんがそこの駐屯地で働いてるんだけどその移転の話で海外に行く

ことになったらしいんだ。おかしいと思わない？移転の話なのになんで海外に行くことになるんだよ」風ちゃんは真面目な顔をして言う。
「んーどうなんだろうな。移転を期に人事異動をするってことなんじゃないか？」
「それでも海外はなくね？それで私はある考えに行き着いたんだ。移転でこの街を出るんではなく、違う目的のために移転のフリをしているんだと。そしてその目的とは海外に自衛隊をスパイとして送り込んで海外制圧を狙っているんだよ！まずは東南アジア、中央アジアから攻めていってそしてさらにアフリカ大陸。そしてヨーロッパを経て一気に先進国を叩く。そして我らが日本国は世界征服を完了させるのさ！」
「そっか……鞘は今日の数学の宿題をしてきたか？」
「してないよー朝ちゃん見せて」
「ダメだ、今から教えてあげるから自分の力で解きなさい」
「りょーかいです朝ちゃん！」
「私の話をスルーするな！」
そういいながら私達は弁当を片付け、席をもとに戻した。
いつも通り午後の授業が始まる２０分前。この時間になると食堂にいた生徒達や他の場所にいた生徒達も教室にもどってくるので、教室は騒がしくなる。１日で一番うるさい時間帯だ。

サヤ　2（後書き）

会話主体にしてみたけどいまいち誰がどの発言をしてるのか分かりません。こういうの難しい。
風香の口調が不安定ですがわざとです。そんな子です。
朝と風香の話し方が似ていて分かりづらいですが風香の会話はサヤとカタカナで呼びます。後裏設定で朝は風香にあこがれていて風香と同じ話し方になっているっていうのがあります。後々書いていきます。

これとは別に会話文のみの小説を書いてるのですが、投稿するのはやめとこうかな

アサ　6

部屋の中を松葉杖を使ってゆっくり歩く。
歩くなんて行為は日常では特になんとも思わないものだが、実際に左右の足を動かし、倒れることなく前に進むということはとてもすごいことなのだと実感させられる。鞘の部屋はスペースだけは広いので部屋の中を歩くだけでも充分な運動になる。もちろん健常者にとってはなんでもない運動だが。

この基地に来てから2週間がたつ。やはり3年も意識不明になっていたあとにすぐの運動は体にこたえたらしく、自分としては車に乗って降りただけに思えた行動だが、鞘の部屋についてベッドについたあと程なくして私は寝てしまい、次に起きたのは翌日の夜だった。

「まだしばらくは体も動かないだろうから私の部屋の外には出ないようにしてね」鞘の忠告に従い、私は部屋の中で運動をすることになった。もっとも最初はひとりで立つだけでも一苦労だったが。
部屋の中だけで過ごすのは退屈だったが鞘が本やマンガを持ってきてくれたおかげでその問題はクリアした。またこの施設は独自に電気を供給できるようで夜でも電気をつけることができる（あまり深夜まで明かりをつけることはできないらしい）、しかも鞘の部屋にはお風呂までついていて部屋の外に行かなくても生活に困ることはない。
鞘はいつも朝早くに外にでて、自分の朝食私の分の朝食を持って帰ってくる。そして昼まで部屋で過ごしたら昼食をとりに外へ出て、昼食を食べた後今度は夜までは戻ってこない。いったい何をしているのか一度だけ聞いたが「外でいろいろ仕事をしないといけないんだよ」と詳しい内容は教えてくれなかった。なんでも今は体を動かせるようにとのことだ。

「ただいまー」
鞘が勢い良くドアを開けてきた。
「うわっ！朝ちゃん大分歩けるようになってるじゃん！」
「まだ松葉杖がないと思うように歩けないけどな」
「充分な進歩だよ！これならもとのように歩ける日も近いね！じゃあ私ちょっとお風呂に入ってくるから。あ、夕食はここにおいておくからね」
そういって、夕食の乗ったお盆をおくと、肩にかけていたリュックと刀を置いた。
２週間も鞘と一緒にすごしているが、やはり鞘が物騒な刀を持っているのには慣れず、刀には近づくことができない。本人は護身用といっているがやっぱり鞘と刀は似合わない。名前だけなら似合ってるのに。
外から帰ってきたときの鞘は大抵汗をかいてることが多く、すぐに浴室に行きシャワーをかかる。今も鞘は汗を掻いているらしく、髪はしっとりとして額に張り付いているし、服もしっとりして体のラインがより浮き出て見える。
「うん？一緒にはいる？」
「いや、遠慮しとく」
「残念残念……」とつぶやきながら鞘は浴室へ入っていった。私はいつものようにご飯の準備と鞘が脱ぎ捨てた服を片付けをする。鞘の服はところどころが破れていて、さっきまで着ていたから暖かく、少し湿ってる。

鞘が浴室から出てきて一緒に食事をする。
「朝ちゃん部屋の中だけで退屈になってない？」
鞘がごはんをほおばりながら話しかけてくる。今日のメニューはカレーライスだ。
「いや、鞘が持ってきてくれた本のおかげでそこまで退屈は感じて

ないよ」
「よかったーじゃまた本を見つけたらもってくるね」
しかし実際外に出てみたいという気持ちも無いわけではない。さすがに一週間も部屋の中だけにいるのはきつかった。

「結構歩けるようになったみたいだし建物の外はまだダメだけど明日は建物の中を案内するよ」
「それと……この前車の中でも話したけど、いろいろ詳しいことをちゃんと話すね」
私もこの2週間聞きたいことがいろいろあったが、鞘にはまだ一度も聞いてなかったし鞘もその話題にはふれてこなかった。
「みんなのこと」
私の両親や鞘の両親と妹、そして風香はいまどうなってるのかを。

アサ　6（後書き）

ちょっと時間がかかってしまった。

次回　二人の家族、風香はどこにいるのか？無事なのか？

筆者にもどうなるかまだ分かりません

アサ　7

「朝ちゃんのお母さんもお父さんも、私の家族もみんな死んじゃった」

鞘から発せられた最初の一言は、それでも私にそこまでの動揺を与えることは無かった。さすがに2週間も姿を現さないのでなんとなくそうなのではないかと感じてしまっていた。

「前に違うアジトにいたんだけどそのときに敵に襲われてねーそれで朝ちゃんの両親と私の両親はアジトに取り残されちゃったんだよ」

鞘が詳しい話を続ける。最初の一言ではそこまで感じなかったけど、両親の最後の瞬間を聞くたびに悲しい気持ちがあふれ出てくる。私にとってはこんな世界に目覚めるちょっと前は普通に喋ってた人達なのだ。

自然と涙がこぼれそうになる。

「私の妹はね、ここのアジトに来る少し前に敵に襲われてね。あっという間だったよ」

鞘の妹、梢ちゃんには家に遊びに行ったときに何度もあったことがある。姉とは違ってしっかりしてていつも姉である鞘に「しっかりしなさい！」と怒っていた。そんな妹のことも鞘は淡々とつげる。

「泣かないで朝ちゃん……確かにつらいけど、朝ちゃんには早く慣れてもらわないといけないの」

「この世界じゃ、人が死ぬことなんて普通なくらい突然なことだから」

鞘は私より多くの人の死をみてきたから。

そんな鞘の気持ちを考えてまた涙が止まらなくなる。そんな私に鞘はやさしく抱きしめてくれる。ちょっとカレーライスの残り香がするけどやっぱり良い匂い。

「……風香はどうしてるんだ？」

少し落ち着いた私はもう1つ気になっていることをたずねてみた。
「風ちゃんはねー行方不明なんだよね」
「行方不明？」
「うん、風ちゃんもこのアジトに来る前に離れ離れになっちゃって、無事なのかどうかまったく分からないんだ」
「そう……」
「探したりはしたんだけどね……さ！明日はいろんなところを案内するから今日はもうねよっか！」
そういって鞘は電気を消してベッドについた。私もベッドに入って毛布をくるみいろんなことを考えた。家族のこと梢ちゃんのこと、そして風香のこと。
風香はいまどこにいるのだろうか。
生きているのだろうか。

アサ　７（後書き）

更新遅い上に今回短くてすみません。
９月はちょっと忙しかったので１０月はもっと早く更新したいと思います。

サヤ　3

ぽつりと水滴が頭に落ちる。
それは髪の毛の間を通り、額をとおり抜けて涙のように眼から頬にこぼれた。
雨雲に覆われた空は周りの暗さをいっそう際立たせ、一人でつっ立っている私をさらに孤独にさせるような気がした。

場所はバス停。
大粒の雨が地面に弾ける様を見ながら、ただただ立つことを続けている。そのまま時間が来るのを何もせずに待ち続ける。
「なーにつっ立ってんだよサヤ」
ここに着てからどれくらいの時間がったったのか分からないけどようやく風ちゃんがきた。
「風ちゃん1日ぶりー」
「おうサヤ、ってお前服びしょびしょじゃないか！傘させよ傘！」
風ちゃんは呆れ顔で私を見ていった、ポケットからハンカチを出して私の服を拭いてくれる。
「えへへー傘忘れてきちゃった」
「おまえなー結構長い間降り続けてただろ、もしかして雨が降ってない時からずっとここにいたのか？」
「うーん来たときは雨降ってなかった気がするんだけど、どうだろ？」
本当に思い出せない、確か家から出てすぐに雨が降ってきたのだろうか。
「そんなにここにいたのかよ、ごめんな待たせちゃって」
「いやーこんな天気だから時間が分からないのはしょうがないよー」
太陽が真上に来たころくらいにこのバス停に集まる。それが何も

することが無い私にとって今一番重要な約束だった。

朝ちゃんの事故が起きてから2ヶ月はたったと思う。こういうと全てのことが朝ちゃんの事故から始まったかのようだけど、私にとってはやっぱり始まりは朝ちゃんの事故からな気がする。事故が起きてからすぐ通信機器が使えなくなり、電気は止まり水道から水が出ることはなく私達の生活は一変することになった。

「いやぁ、それにしてもやっぱアレだよなぁ。ケータイが使えないってだけでこんなにも困ることになるとは思わなかったよな。いや、困ることは分かってたけど誰々とメールできないとか電話できないとか暇つぶしにゲームできないとかの類しか考えてなかったじゃん。まさか待ち合わせすらも満足にできなくなるとはな」

「本当だよね風ちゃん。ケータイが無かった時代の人はどうやって待ち合わせなんかしてたんだろうね」

実際にケータイがないと誰にも会うことがないのだ。待ち合わせの場所や時間も指定できないし直接会うまでは本当にその人と会えるのかどうか不安でしょうがない。クラスで隣だった男子とはこの1ヶ月まったく会ってなかった。あんなに喋っていたのに。

こんな状況になっても学校は1ヶ月は続いていた。いや、学校だけではなくスーパーやコンビニ、本屋など全ての施設がいつもどおりの毎日を続けようとしていたし、お父さんもなんのためかは分からないが毎日会社に出勤していた。どんなに状況が変わっても人間は前と同じことをして安心を得ようとするものなのだろう。

だがそういった行動がいつまでもできるわけなく、学校は日に日に生徒が少なくなっていった。来なくなったからといって連絡をとることもできず、先生達はそのままにしておいたし、そのことがますます生徒を少なくさせることになった。ついには先生も学校に来ない人が出始め。その頃には学校に意味を感じられなくなった私と風ちゃんも行くのをやめることにした。

そしてその時に毎日ここで会うことを決めたのだ。
「そういえばサヤ知ってるか？昨日の夜に駅の近くのコンビニが襲われたみたいだぜ？」
「えーあの可愛い店員の伊藤さんがいたとこー？」
「お前の興味はそこか！てか何で名前まで覚えてるんだよ！……まぁそこだな。今日の朝私たまたまそこ通ったから知ってるんだけど店の中ぐちゃぐちゃでひどかったぞーガラスも割れてたし。食べ物とか根こそぎとられてたし」
最近ではこういった話をよく聞くようになった。スーパーやコンビニが狙われ、食料や生活必需品が奪われる。夜になり暗くなってしまえばスーパーやコンビニは格好の的になってしまう。しかも防犯機器やビデオカメラも機能しないため犯人を特定することはできないし、最近では警察でさえまともに事件に取り合うこともしなくなってしまった。
「そっか、食料は大切だからね」
こんな生活になって一番困るのは食料の確保だ。私の家では何かあったときのためにと日ごろから缶詰などの保存食をためており、電気が止まった時すぐに大量に買い込んだのでしばらくは大丈夫だったがそれでも、それがいつまで持つのかはわからない。誰も口には出さないが私もそんなことをしないといけない日が来るのは遠くは無いかもしれない。
「それに最近はどんどん物騒になってるしな、サヤは普段から抜けてるから特に注意しろよな」
「失礼な！私だって最近は自分の背後とかに気をつけたりするんだから！」最近私は外に出るときはハサミをカバンの中に入れておくことにした。これなら自分で使うときは安全だし、いざというときは武器になるしね。
「そういえば昨日はいけなかったけど朝ちゃんの様子はどうだった？」
「あいつはいつもどおりだよ、うんともすんとも言わない」

朝ちゃんが事故に遭ったとき、私と風ちゃんの動揺はとんでもないものだった。私は泣き叫んだし、風ちゃんは言葉を発することができずただ朝ちゃんを抱きしめていた。今、朝ちゃんは朝ちゃんの両親の家で寝ている。病院が機能してないことと、他の施設においていくことに危機感を感じての朝ちゃんの両親の判断だ。朝ちゃんのお母さんが看護師さんだったので自宅に戻ることを許されたのだ。私と風ちゃんはほぼ毎日朝ちゃんの家に通うことにしている。ほかにすることもないし、大好きな朝ちゃんの顔を見れるから一石二鳥だ。だけど目覚めない朝ちゃんの顔を見るのは悲しい。

「よう、鞘に風香」

雨の先から突然女の子が現れた。声の主はそのまま私達のいるバス停に近づくと傘を閉じ、一度外に向けて開き水をはじいた。少ししっとりとした長い金色に染まった髪を掻き揚げる姿は私や風ちゃんより断然大人っぽく見える。

「あー！清（キヨ）ちゃんだー！」

私はすぐに彼女に飛びついた。彼女の名前は小野清水（オノキヨミズ）、クラスで私の後ろの席に座っていて、一言で言えばすごくかっこいい女の子だ。

「会いたかったよー清ちゃん！」

「おぉー鞘久しぶりだねー、よーしよしよし！」いつものように私の頭を撫でてくれる。

「ほんとに鞘はよく懐いてるな。清水久しぶり」

「風香も久しぶり！つっても1週間ぶりくらいかな？」

私の耳のちょっと上から清ちゃんの言葉が降ってくる。清ちゃんの体はやわらかくて抱きついて撫でられると本当に落ち着く。

「それにしても今まで何してたんだ？襲われたのかと思ったよ」

「もし私が襲われたなら反対にボコボコにしてるよ。ちょっとごた

ごたしててね」
「そうか。それにしても遅かったなー私が言うのもなんだけど」
「こんなに暗かったら時間なんて分かるわけ無いじゃん。まぁさっきまで寝てたんだよ」
頭上で続けられる清ちゃんと風ちゃんの会話。清ちゃんが喋るたびに大きな胸が少し動いてなんだか面白い。
「っと悪い鞘、そろそろ離れて。一服するから」「はーい」
素直に離れる。清ちゃんはジーンズのポケットからタバコを取り出すと咥え火をつけた。タバコはなんて読むか分からないけど赤い丸いデザインが描かれていた。
「わーわー未成年なのにいけないんだー」
「うるさいなー風香は。どうせ注意する奴なんていないんだからいいだろ。それにこんなことでもしないと、やってられないしね」
そう言った後、タバコを清ちゃんが吸い終わるしばらくの間沈黙が続いた。タバコから清ちゃんの口へ入り胸を動かして口から吐き出される煙は白く、その苦い匂いをちょっぴり我慢しつつ煙の行方を私はじっと追いかけた。

「そういえば駅前のコンビニに強盗が入った話は聞いた？」タバコを地面になすりつけ清ちゃんは口を開いた。
「さっき風ちゃんに聞いたところだよ」私は答える。
「鞘はボーっとしてることが多いから襲われないようにちゃんと注意するんだよ」
「それも風ちゃんから聞いたよ！」
「あはははは、でも本当に最近は危ないみたいだから二人とも私みたいになんか武器を持っとけよ」そういって清ちゃんは傘の横に立てかけてある長い袋を手に持った。元剣道部だった清ちゃんだから竹刀でもはいっているのだろう。
「私だって最近はスタンガンとか持ち歩いてるんだぞ。でも最近は

本当に物騒になってきたよなコンビニなんかよく襲われてるみたいだし」風ちゃんはしんみりとつぶやいた。
「駅前のコンビニは私も狙ってたんだけどねぇー」清ちゃんはおどけた感じでウインクしながらこういった。
「清ちゃん！コンビニ強盗はよくないよー！」
「なーにいい子ぶってるんだいこの子は」
「だってー人のものを取るのはよくないよー」
「私はいつも鞘のハートを奪ってるけどね」手を銃の形にして清ちゃんが私に向けて撃った。ちょっとださい。

「でも危険なのはそれだけじゃないみたいなんだよ」清ちゃんが真顔になって続けた。その表情はたださっきの発言が恥ずかしかったというだけではないような感じがした。
「それだけじゃないっていうのは？」風ちゃんが真剣な感じを察して話を促す。
「他校の友達なんだけどさ、エリっていう子がいて一昨日の朝偶然会ったんだけどものすごく険しい顔しててさ、何があったのか聞いてみたら彼氏がいなくなったんだって。何でもその前の日の夜にいつも待ち合わせをしてる場所に行ってみたらまったく来なくて、不安になって近くを歩いてたら細い路地で地面や壁にいっぱい血の跡みたいなのがついてる場所を見つけちゃって、どうしていいか分からなくなってそのまま私に会うまでずっと彼氏を探し回ってたらしいんだ。だから昨日はエリと一緒にずっと彼氏を探し回ってたんだ。その彼氏の高校にまで探しにいったんだよ」
「へぇー清ちゃんやっさしぃー」
「もちろん鞘がいなくなったら一生かけても探してあげるわ。でも逆に鞘が私を見つける方が早いかもね、ご主人様の匂いだー！ってさ」
「私は犬じゃないよ！」
「はいはい、コントはいいからさっさと話を続けてくれ」

風ちゃんが呆れ顔で話を促す。真面目モードの風ちゃんはツッコミを放棄するからつまんない。
「それでね、その彼氏の友達何人かの話を聞いたんだけどそのうちの一人が変な動物に襲われたんじゃないかって言い出したんだ」
「変な動物？そいつのたちの悪い冗談か？」
「私もそう思ったんだけど、他の奴の中にも同じようなことを言い出す奴が現れだしてて、実際に見たって言う情報や被害にあったていう話もあった」
「本当なのー？」
「うーんわからん。言っちゃ悪いけどその高校ってガラの悪い奴が多くて、ヤクなんかやってる奴もいるらしいし。彼氏やその友達もやってたらしいし」
「犬かなんかにでも襲われたんじゃないのか？」
「そうかもしれないんだけどね。でも最後にエリの彼氏と一緒にいた奴に話を聞いてみたら、その日の夕方にエリの彼氏と別れてから道歩いてたらしばらくして別れた方向から悲鳴が聞こえて、驚いて後ろを見たら気持ち悪い豚みたいなカバみたいなのがこっちに向かってきてあわてて走って逃げ出したんだって」
清ちゃんが話した内容はエリって子の彼氏が謎の生物に襲われて行方不明になってしまってしかもその生物はまだ何人もの人達を襲っているんじゃないかってことだった。なんだかへんてこな話すぎてバカみたいだけどその話をする清ちゃんの顔は真面目だった。
「結局彼氏は見つからないし、エリはふさぎ込んじゃうしでなんの解決もしてないんだけどね」
そういって清ちゃんはまたタバコを取り出す。今度は煙が消えても沈黙は終わらなかった。

「うーんなんともいえないし分からないな」しばらくして風ちゃんがポツリと言った。

「そうだね、聞いた私も分からないからとにかく気をつけるしかないね」清ちゃんも呟いた。
「とにかくその彼氏さんが早く見つかるといいねー」私も返事をしてみた。

「とにかくこの話はまた今度にして夜にならないうちに朝のお見舞いにでもいくか」風ちゃんが続ける。
「そうだね。久しぶりに朝の顔も見てみたいし」
「うん。あ、でも私傘持ってきてないよー」
「しょうがないな鞘は。私が相合傘をしてあげよう」
私達3人はバス停を出て朝ちゃんの家へと向かった。

サヤ　3（後書き）

新キャラでました。小野清水、清ちゃん、タバコなんか吸っちゃって悪い子です。
たぶんそんなに活躍はしないんじゃないかな。

今回はちょっと文章を長くしてみたのですがどうでしょうか？大体2千字以内でさっと読めるようにしようかと心がけているのですがもっと長くじっくり読めるようにしたほうがいいのかな？お暇でしたら感想・意見お願いします。

あと今短編も書いてるので続きはちょっと遅くなるかもです。
全体的にシリアスなのでギャグ回をいれてもいいかな？

アサ　8

光を感じて目を開けるとカーテンの隙間から光が漏れていて朝になっていることを知った。ちなみにこの部屋に時計は無いので正確な時刻は分からない。

隣を見ると一緒に寝ていたはずの鞘はもういない。

あまり考えないようにしているけど、私と鞘は同じベッドで寝ている。何でも一緒に寝たほうが楽だとか言いくるめられたけど、実際一緒に寝てみると隣に人がいることでこんなに安心して寝ることができるとは思わなかった。それも鞘だからこそかもしれない。

「さてと」

体を起こし、ベッドに腰をかける。ベッドの脇に置いてある松葉杖を持ちゆっくりと立ち上がる。そろそろ松葉杖なしでも起き上がれると思うのだが、骨が弱っているらしくちょっとしたアクシデントで転んで骨を折るかもしれないと、鞘から注意されてるのでやはり松葉杖を頼りにしている。

鞘に建物の中を案内してもらってから、ここしばらくは鞘と一緒のときは建物の中を歩き回るようにしている。やはりまだ外には出れないけど。

基地の中は外からの見た目どおり相当広く。５階建ての建物の中には数多くの部屋があるようだ。そのほとんどは他の人が住むための部屋になっているが、１階には会議室や多目的ホール、トレーニングルームなどの様々な施設になっていて大体の人は２階以上の部屋に住む。

私と鞘の部屋は１階にあるが、それは鞘が隊長になっているからだそうだ。鞘は「隊長特権だよー！」と嬉しそうに言っていた。

「おっ、朝ちゃんおはよう！」扉が開く音がして鞘が入ってきた。

「おはよう、ってノックぐらいしろよ！」

「なんでー？私の部屋だよ？」
「私が着替えてたりしたらどうするんだ！」
「そりゃー見るよー」
悪びれる様子もなく言い放つ鞘だった。
「それより、朝食もらってきたから一緒に食べよう！あとこれを食べたら出かけるから用意しててねー」
そして気にせず話を続けてきた。
「……えっどこに？」
「リーダーのところだよ」

朝食を終えた私と鞘は準備をして1階の一番奥にある部屋へと向かう。ここにリーダーはいるらしい。というか鞘が隊長なのにリーダーがいるという意味が若干よく分からなかった。
「失礼します」
鞘がノックをする。さすがにリーダーと会うからなのか鞘も緊張している様子だ。
「どうぞ」
部屋の奥から声がして鞘がドアを開ける。中では男の人がソファーに腰をかけ、本を読んでいた。

「ちゃんと挨拶をするのは始めてかな？はじめまして、ここのリーダーをしてる久瀬悠二（クゼユウジ）です。」
リーダーはリーダーという役職に似合わず、私達と同じかちょっと上くらいの年齢に見えた。そんな子というと鞘の隊長っていうのは全然似合わないどころじゃないが。髪は短くジーンズにシャツといったラフな格好でそれもリーダーにしてはラフすぎる気がする。好青年という言葉がぴったりな気がする。
「はじめまして、前下朝です」

「うん。じゃあアサと呼ばせてもらってもいいかな？ここではみんな下の名前で呼ぶようにしてるんだ。僕のこともユウジでいいよ」
「はい」
「じゃあとりあえず飲み物ものでも飲もうか。二人ともコーヒーでいいかな？サヤも……いいね？」
リーダーの言葉に表情を硬くしたままサヤはうなずいた。

アサ　9

「アサ君も見たと思うけど、今この世界……いや日本だけなのかもしれないが、この日本は崩壊してしまったんだ」

リーダーと呼ばれる青年、久瀬さんはそう喋った。もっともその後に「たぶん」と言葉を続けたのだが。

誰もが今世界がどうなっているかわからないらしい。
世界全体が今私達がいる場所のようになっているのか、またはもしかしたらこの地域だけがこのようになっていて、他の場所ではそれまでの日常が繰り広げられているのか、情報伝達手段がない今誰にも確認を取ることはできない。
この組織でも確認できたのはこの町の中くらいで、それ以上は危険なこともあり、誰も知らないという。
「もっとも、あの事件の前から自衛隊がいなくなったりしていたところをみると、無事な場所がある可能性は十分あると僕は思っているけどね」

久瀬さんはそう追加した。
確かにそういう目で見れば、あの時期の自衛隊の移転は急だった気もする。しかしそれを判断することは今の私たちにはできない。

久瀬さんは静かにコーヒーを飲み、話を続ける。
「今では町中に赤い目の生物どもがうようよいる。あるものは人間のような形をとり、またあるものは動物のように俊敏な動きを見せる。総じて僕らを襲い、喰らう。町の人間の半数以上は……彼らに襲われてしまった。君の両親や、サヤの家族、僕の両親だって。」

そういって彼は私にコーヒーを飲むように促す。さっきから一度も手をつけてなかったので一口飲んで苦味をかみ締める。見ると鞘もコーヒーには手をつけていなかった。

「僕たちはこの状況から何とか生き延びるために、この組織を作ったんだ。もっとも作ったというか逃げ延びた人達が集まって自然にできたようなものなのだけどね。そこでどうしてか僕はリーダーを務めることになってしまったということなんだ」

組織を作ろうと彼は言った。今までなんとか逃げ延びてきた人たちはそれを受け入れこの組織が出来上がったらしい。そういった事情もあって彼がリーダーをすることになったということだ。確かにまだ少ししか会話をしていないが、彼はなんとなく人を惹きつける何かを持っている気がする。

「さてここの組織の話をしよう。今僕たちはなんとか生き延びるために2つの行動を軸にしている。まず1つは食料などの生活必需品の確保だ。これはこの基地の中に菜園スペースを作って食物を育て

ている。また基地の外にでて食料を確保しに行くこともある。もう１つは赤い目の生物や、他の人間から身を守ることだ。これも基本的には基地の中にいれば安全だが、２４時間見回りが必要なのと。可能ならこちらから赤い目の生物を攻撃することもある。」

だいたい組織は外で活動するチームと中で活動するチームの２組にわかれる。外のチームは食料の確保や周りに敵がいたら排除、周りの施設の確認、人の有無の確認をする。中のチームは食物を育てたり、掃除、や洗濯などの生活空間の確保などを行う。別に明確に２つのチームが分かれているわけではない、中の仕事と外の仕事を一緒にする人もいる。

「君はまだ目が覚めたばかりだからきついと思うが、体が動けるようになったら中の仕事を手伝ってもらいたいと思っている。申し訳ないが今の僕らは自分達が生きるのにも精一杯なんだ」

久瀬さんはそういうと申し訳なさそうに苦笑した。リーダーとして今現在の状況を何とか打破したいと思っているのだろう。たしかにこの人はリーダーにふさわしい気がする。

「はい、大丈夫です。私だって寝てばかりではなく、何とかみんなの力になりたいです。なんなら今日から働いてもかまいません」

「朝、それはだめだよ！まだ十分に歩けるようになったわけじゃないんだから」

鞘が始めて口を挟んだ。私は鞘の注意よりも、鞘が私を始めて呼び捨てしたことに驚いた。

「サヤの言うとおりだアサ君。君はまだ十分に動けるわけじゃないからゆっくりリハビリをして動けるようになってから僕たちを手伝ってほしい。それくらいの間なら僕たちだって君を守ることはできる」

そういって彼は微笑んだ。ちょっとかっこいい。

「しかし本当にサヤが君を連れてきたときは驚いたよ。君が今まで寝ていて目が覚めたのも驚きだが、サヤなんて君がいることなんてまったく教えてくれなかったんだからな」

重要な話は終わったのか、リーダーは気楽な感じで話しかけた。

「そうなんですか？鞘が？」

鞘は基本的にどんなことでも包み隠さずみんなに言ってしまうような、秘密を隠せない人間なので、私のことを言わなかったというのは驚きだ。そういえば何故私を基地から離れたあの施設に置いていたのかも気になる。

「もう話が終わったのならいいだろ？私は用事があるからもう出るよ」

突然、鞘はそう言い放つと、私に目も向けず立ち上がり扉をあけ外にでた。

バタン

扉の音とともに辺りは静寂で包まれた。

私はいきなりの鞘の行動に頭が追いつかず、扉のほうを向いて固まった。

「まだ彼女は心を開いてくれないか」

後ろでリーダー、久瀬さんの言葉が漏れ、私は久瀬さんのほうに向き直る。彼は苦笑したままこちらを見る。

「鞘は、リーダー……ユウジさんのことが嫌いなんですか？」

自分で言いながらありえないことだと思う。鞘が人のことを嫌いになれるような人間じゃない。彼女はいつだってみんなを愛し、みんなから愛されるような人間なんだ。それなのに彼女があんな行動を示すなんて考えられない。

リーダーは私のそんな気持ちを知っているのか、ゆっくりと答えた。

「サヤは――彼女はここに来たときから、皆に対してあんな感じだよ。誰とも心を開こうとしない」

リーダーからでた答えはとても信じられないものであった。

アサ　9（後書き）

久しぶりの更新。
サヤがなんだかメンヘラみたいな感じになっちゃってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7016m/

下の下は真っ平で

2010年12月21日05時40分発行